

バイタルネット (新潟市)

都市対抗初出場を強豪チームへの足がかりに。仕事と野球の両立を果たした野球が大好きな選手達が初の舞台に挑む！！



練習の準備を行う選手達。少しでも練習時間が取れるよう、先輩後輩関係なく皆で素早く行う。

夏の高校野球甲子園大会で昨年は日本文理が準優勝、今年には新潟明訓が8強進出と躍進を見せている新潟県の野球界。29日から始まる都市対抗野球でも、同県代表チームが40年ぶりに本戦出場を果たした。今回が初出場となる新潟市のバイタルネットだ。
創部39年目。ニチエーとしてスタートし、2001年に会社の合併に伴いバイタルネットとなった。

10年目で都市対抗出場の切符をつかんだ三富監督は「出場が決まりホッとしたという気持ち強い」という。「一度監督を辞めたが、2006年に会社から監督をやるようにという話があった。2回目というのは結果が求められていると感じた」それまでは来る選手を優先的に採用していたが、監督自らが様々な大学を回り選手のスカウトを行ったという。そんな形で採用した3年目の投手の平井選手が予選で活躍するなど成果が上がってきている。

バイタルネットは東北地方と新潟を中心に医薬品・医療機器・検査診断薬などの卸売、それらの管理や配送などの物流関連の仕事を行っている企業。選手の中でも3名が営業、他全員は物流関連の仕事を行っている。同チームは企業チー



左上/ティーバッティングを行う選手。野手陣は少しでも時間があればこの練習を行う。
右上/ノックを受ける選手。固い守備が持ち味のチームだけに、一本一本大切に行っている。
左/自分でベースを置いてノックを受ける選手。自分を知った上で、工夫した練習。レベルの高い社会人チームらしい練習と言える。

ムには珍しく、仕事と野球を両立させるといふ考えの下、普段から一般社員と同じ量の仕事をこなす。

ただそんな環境にも「大好きな野球ができるのは素晴らしいこと」と選手達は言う。他のチームより仕事を多くこなす分、一社会人としての成長、集中して物事に取り組むことなど野球ばかりの環境では身に付けられないものも多い。

休憩時間でも野球のことを話す選手が多く、先輩選手が後輩選手にプレーについて教え、それとは逆に後輩選手が先輩選手に質問するという場面も見られた。空き時間に空いたスペースにベースを置きノックを打つてもらおうなど工夫した練習を行っている選手もいる。前記のコメントのように、ほとんどの選手が「野球が大好き」「少しでも上手になりたい」という気持ちを持って練習に臨んでいるように思える。また必要最低限の礼儀はわきまえた上で、先輩後輩の間に壁はなく皆が平等に接している。その光景から、チームの人間関係の良さが感じられる。

屈辱がチームを強くした

今回の出場までには苦勞もあつた。チームとしては過去7度代表決定戦で涙を飲んできた。昨年の日本選手権の予選の準決勝で敗れた後、監督・選手らチー

ム全体が思いをぶつけ合った。「もうこんな悔しい思いはしたくない！」

チームは練習量を増やす。冬は野手陣はティーバッティング、トスバッティングなどで各々が一日の練習で約1000本打ち込んだ。全体でも走り込みの量を増やした。「例年に比べランニング、アメリカンノック、中距離走、長距離走など下半身を鍛える練習が多かった。そのため投手陣も春を迎えて全体的に力が伸びていた。また、『これだけやった』ということが自信となりチームに良い影響を与えた」(平井選手)

北信越予選では4試合でチーム打率2.82、平均得点5.75、平均失点2.5。バッテリを中心とした守りで失点を最小限に抑え接戦に持ち込む。準決勝では延長12回の熱戦を制し、代表決定戦では予選リーグで敗れたNTT信越硬式野球クラブ(長野市)を4-3で下した。粘り強さもチームの持ち味といえる。

投手陣は予選の4試合すべてに先発し防御率2.39という安定した成績を残した平井選手、リリーフとして3試合に登板し防御率0.71という抜群の成績を残した田中選手のリードとなる。特に田中選手は「リードして田中選手に繋がればもう安心」(三宮監督)というほどの信頼感がある。それだけに先発の



左 / グラウンドの上の観客席から練習を見つめる三富監督。全体を見て気になった所を注意したり、指示を出したりする。

右 / 選手を指導する広野氏。理論的にそして手取り足取り教える打撃指導。選手は学んだことすべてを吸収する気で体に叩き込む。



左 / チームの中軸を打つ伊藤選手。183センチ85キロの体格を活かした豪快な打撃で打線を引っ張る。

右 / チームのカギを握ると言われる先発投手の平井選手。予選同様、安定感のある投球が期待される。



「毎年のように都市対抗に出場するような強豪チームになることが目標」(三富監督)

そのために田中選手、平井選手のような「コントロールの良さ、気持ちの強さ、絶対的な持ち球を持っている」投手を育てる必要があるという。

バイタルネットになった年に日本選手権初出場し、今年までに谷元選手(現日本八ム)、星野選手(現巨人)という二人のプロ選手が誕生した。そ

平井選手、二人の間を繋ぐ役割が期待される補強の岡本選手の出来が本大会でのカギを握る。

「打てる打線ではない」(三富監督)という打線も、中田・西武・ロッテなどでコーチを務めた広野功氏に指導を受け少しずつ良くなってきた。打撃練習、ティーバッティングを見て気がついた点があると選手に理論的に教えている。

「以前に比べ各選手の打つ時の姿勢が良くなり、体の軸がしっかりしてきた。芯で捉える打球が多くなり、選球眼も良くなった」(広野氏)

予選の準決勝で延長12回に一挙4点を奪い、練習試合でも二死から3連続適時打が出るなど繋がりもある。

強豪チームになるための第一歩

これらの出来事がチームに刺激を与え、会社や地域、学生のバイタルネット野球部に対する目を変えてきた。コツコツとだが確実に目標へと歩を進めている。

「まだまだ発展途上のチームだが、それだけに今回の都市対抗出場は良い刺激になる」(三富監督)

「若いチームなので経験が少なく、今回の都市対抗出場でやっ」とスタートラインに立った。この経験を今後どう活かすかが勝負になってくる」というのは、コーチ兼任選手以外では最年長で中軸を打つ伊藤選手。

「強いチームと試合をして力を試すことができるので楽しみ。そこで経験したことを今後に活かしたい。また最近試合をして(直前の大会で激突。先発した打球が直撃し3回途中で降板)、しっかり投げられなかったHONDA(狭山市)と試合をした」(平井選手)

各々が思いを秘めて、初となる東京ドームでの戦いに備える。

バイタルネットは9月1日の14時から大和高田クラブ(大和高田市)と対戦する。ともに初出場。相手はクラブチームではあるが昨年の日本選手権で8強に進出し、予選では社会人の強豪チーム・パナソニック(旧・松下電器)を破ってきた。好ゲームを期待したい。